

為替相場展望

2026年5月



調査部 マクロ経済研究センター

<https://www.jri.co.jp/report/medium/exchange/>

目次

- ◆ドル円相場見通し……p. 2
- ◆ユーロ相場見通し……p. 3
- ◆トピック ……………p. 4

メルマガ	X (旧Twitter)	YouTube
 経済・政策情報メールマガジン	 日本総研調査部X (旧Twitter)	 日本総研YouTube

調査部 マクロ経済研究センター（米欧経済グループ）

研究員 吉田 剛士 （ Tel: 070-3359-3804 Mail : yoshida.tsuyoshi@jri.co.jp ）
研究員 西村 朱央

◆本資料は2026年5月1日6：00時点で利用可能な情報をもとに作成しています。

◆「[経済・政策情報メールマガジン](#)」、「[X \(旧Twitter\)](#)」、「[YouTube](#)」でも情報を発信しています。

本資料は、情報提供を目的に作成されたものであり、何らかの取引を誘引することを目的としたものではありません。本資料は、作成日時時点で弊社が一般に信頼出来ると思われる資料に基づいて作成されたものですが、情報の正確性・完全性を保証するものではありません。また、情報の内容は、経済情勢等の変化により変更されることがあります。本資料の情報に基づき起因してご閲覧者様及び第三者に損害が発生したとしても執筆者、執筆にあたっての取材先及び弊社は一切責任を負わないものとします。

◆ドル円相場回顧

4月のドル円相場は、下旬にかけて159円台を中心に一進一退の展開。米国とイランの停戦への期待が有事のドル買い需要を後退させたものの、結果的には戦争終結の合意に至らなかったことから、ドル買い需要が再び増加。わが国では、日銀が中東危機による経済への影響を見極めるとの見方が強まったため、早期利上げ観測が後退し、円は弱含み。もっとも、政府高官による相次ぐ円安けん制発言が為替介入への警戒感を強めたことから、過度な円安進行には至らず。

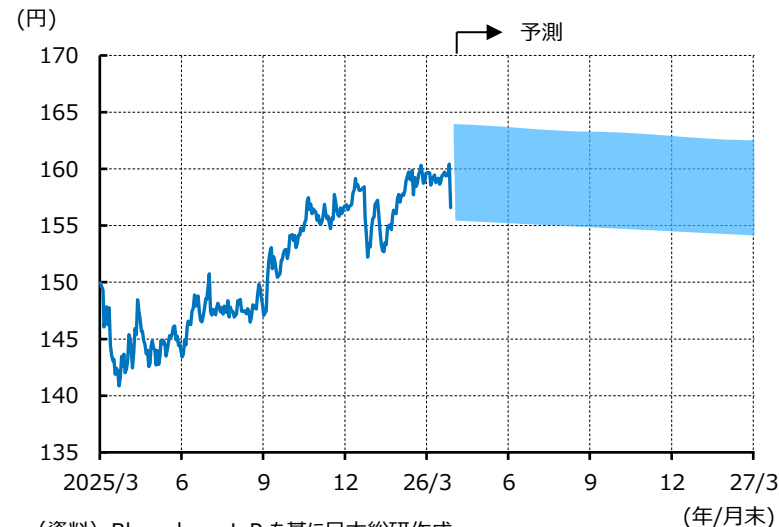
月末には、一時160円を超えてドル高・円安が進行。米国でF R Bの利下げ観測が大きく後退したことが背景。これを受けて日本政府・日銀が為替介入に踏み切り、円は一時155円台へ急騰。

◆今後の見通し

先行きのドル円相場は、強弱材料が混在することで、横ばい圏で推移する見通し。資源価格は当面高止まりするとみられ、わが国の貿易赤字の拡大が実需面から円を下押しする見込み。

一方、日米金利差の縮小がドル安・円高圧力に。日銀は早晚利上げを実施し、その後も中東情勢の経済への影響などを注視しつつ、緩やかなペースで利上げを続けると予想。F R Bは資源高によるインフレ再燃懸念から当面政策金利を据え置く見込み。

ドル円相場見通し



(資料) Bloomberg L.P.を基に日本総研作成

	2026年				2027年
	1~3	4~6	7~9	10~12	1~3
期中平均	156.88	158	157	157	156
(高値)	160.46	164	163	163	162
レンジ	∩	∩	∩	∩	∩
(安値)	152.10	155	155	155	154

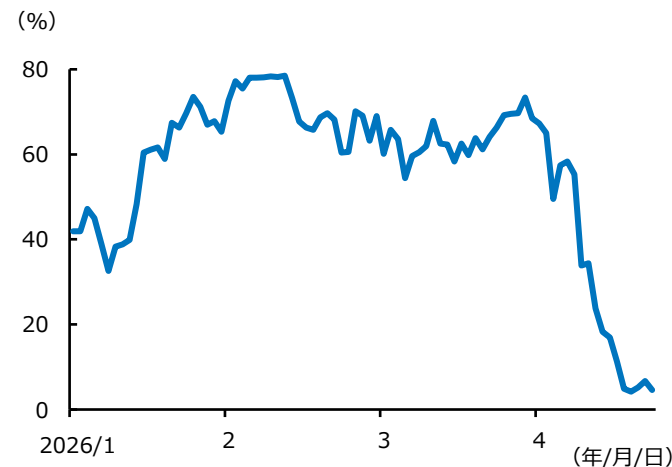
予測

WT I 原油先物価格の推移と中東危機の動向



(資料) Bloomberg L.P.、各種報道を基に日本総研作成

市場による日銀の4月利上げ観測



(資料) Bloomberg L.P.を基に日本総研作成

(注) 4月27日までのデータ。

◆ユーロ相場回顧

4月のユーロドル相場は、中旬にかけて一時1.18ドル台半ばへユーロ高・ドル安が進行。米国・イスラエルとイランが2週間の戦闘停止で合意し、戦争終結への期待が高まったことで、投資家によるリスク回避のドル買い圧力が後退したことが背景。もっとも、下旬にユーロ安・ドル高が進行。中東情勢を巡る不透明感が再び高まったほか、欧米景気の方向感の違いもユーロの下落要因に。米国の購買担当者景気指数（PMI）が市場予想を上回った一方、ユーロ圏のPMIは景気のよし悪しの分かれ目となる50を下回る結果に。

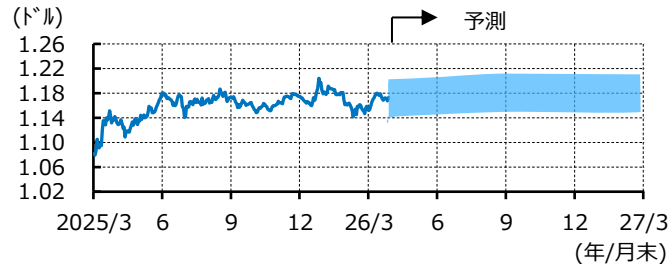
対円では、日銀の早期利上げ観測が後退したことで、下旬にかけて一時187円台後半へユーロ高・円安が進行。月末には、ドル円での円買い介入観測をきっかけに、一時182円台前半へ円が上昇。

◆今後の見通し

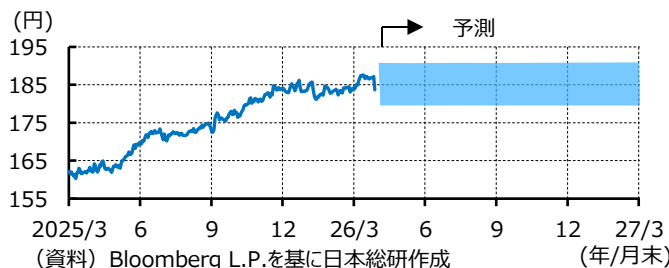
先行きのユーロドル相場は、ユーロの強弱材料が混在することで、ほぼ横ばい圏で推移する見通し。中東危機による資源価格高騰を受けて、ユーロ圏の景気減速懸念が高まり、ユーロを下押しする見込み。一方、ECBは物価高騰を抑えるため早晩利上げを実施するとみられ、欧米金利差の縮小がユーロ下支え要因に。

対円では、横ばい圏で推移する見通し。ECB、日銀ともに利上げを実施することが予想され、金融政策の方向性の違いが出にくいことが背景。

ユーロ相場見通し

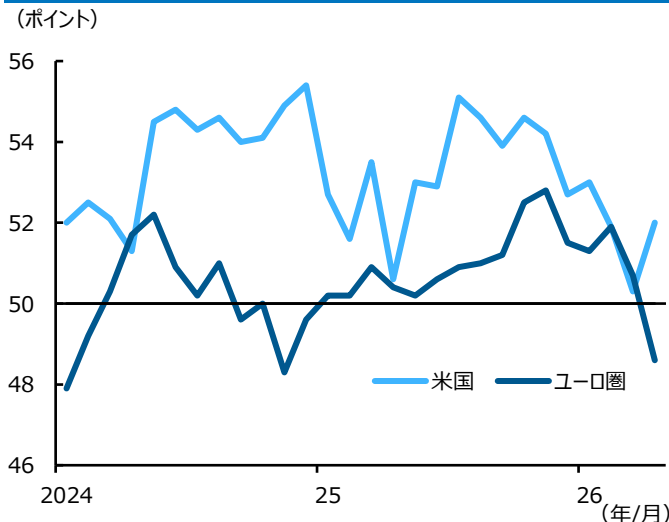


	2026年				2027年
	1~3	4~6	7~9	10~12	1~3
期中平均	1.171	1.17	1.18	1.18	1.18
(高値)	1.208	1.19	1.20	1.20	1.20
レンジ	∩	∩	∩	∩	∩
(安値)	1.141	1.14	1.15	1.15	1.15

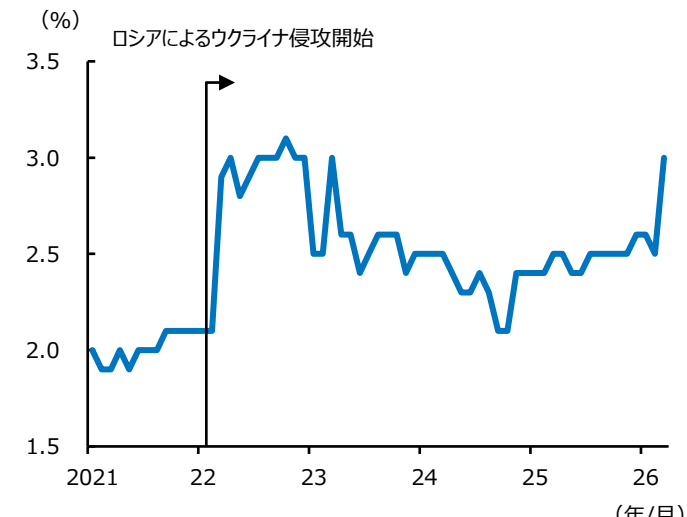


	2026年				2027年
	1~3	4~6	7~9	10~12	1~3
期中平均	183.62	185	185	185	184
(高値)	186.87	190	190	190	189
レンジ	∩	∩	∩	∩	∩
(安値)	180.81	182	182	182	181

ユーロ圏と米国のコンポジットPMI



ユーロ圏消費者の3年先インフレ率予想（中央値）



(資料) Bloomberg L.P.を基に日本総研作成

(資料) ECB、Bloomberg L.P.を基に日本総研作成

◆ユーロ円は過去最高値を更新

4月のユーロ円相場は、一時187円台後半へユーロ高・円安が進行し、1999年のユーロ発足以来の最高値を更新。ユーロ、円の名目実効為替レートをみると、リーマンショックや欧州債務危機を経た2010年代半ば以降、ユーロは長期的な上昇基調にある一方、円は下落基調で推移。

◆需給面などが長期的なユーロ下支え要因に

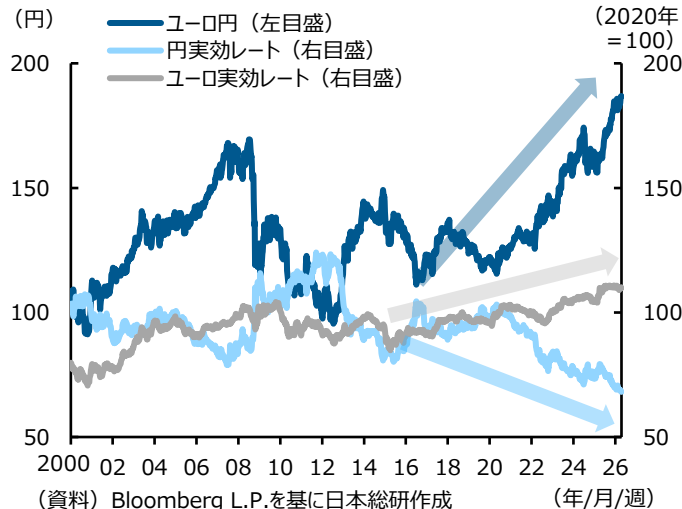
長期的なユーロ高・円安基調の背景として、金融政策の違いに加え、以下3点を指摘可能。

第1に、為替の需給構造の違い。ユーロ圏では、貿易・サービス収支の黒字を維持している一方、わが国では、2010年代以降、企業の生産拠点の海外移転やデジタル赤字の拡大などによって貿易・サービス収支赤字が定着。

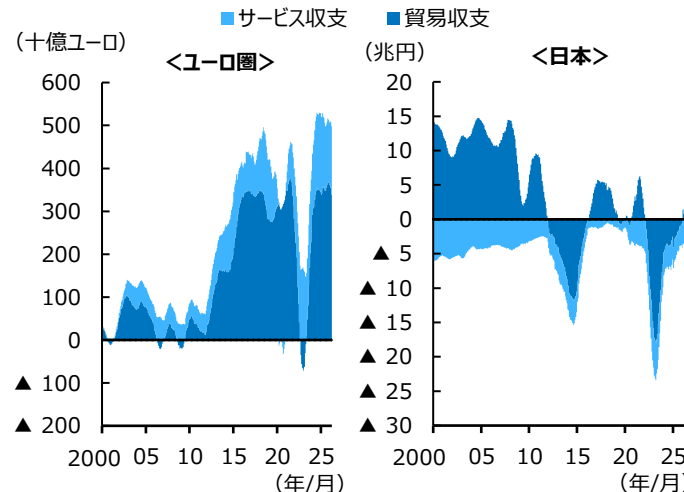
第2に、ユーロ取引量の拡大。ユーロ発足以降、ユーロ導入国数は増加しているほか、EUはEPA（経済連携協定）・FTA（自由貿易協定）を積極的に拡大するなど貿易取引も増加。ユーロ建ての決済や投資の拡大により、構造的なユーロ需要が増加し、長期的なユーロ下支え要因に。

第3に、財政リスクに対する市場評価の違い。ユーロ圏でも一部加盟国の財政悪化懸念は残るものの、日本と比べれば政府債務残高のGDP比は低く、財政リスクは相対的に低。一方、わが国では積極財政を掲げる高市政権発足以降、財政悪化に対する懸念から投資家の円売り圧力が増大。

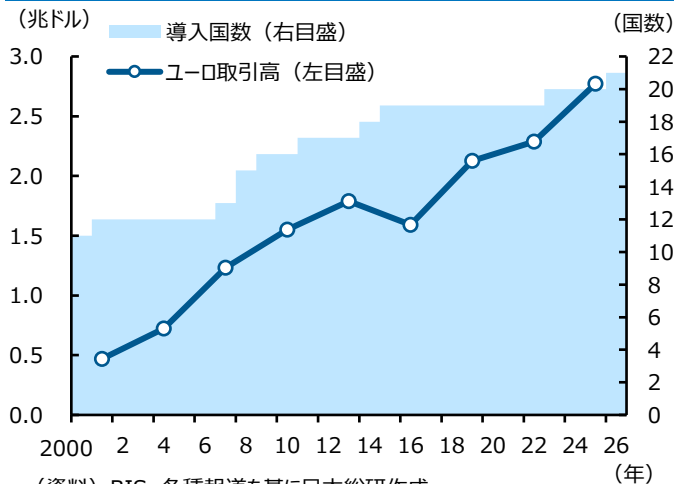
ユーロ円相場とユーロ・円の名目実効為替レート



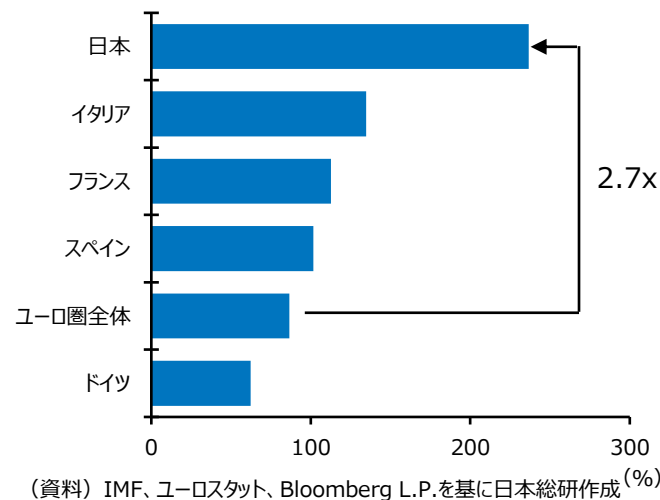
ユーロ圏とわが国の貿易・サービス収支



ユーロ導入国数とユーロ取引高の推移



ユーロ圏、日本の政府債務残高対GDP（2024年）



公表済みのレポート（欧米経済関連）

詳細は、以下のリンクからPDF形式でご覧いただけます。

- | | | |
|---|-----------------------|-------|
| ▶ 地政学リスクに怯える世界経済 ～防衛力強化だけでなく、緊張緩和への努力を～ | 石川智久 | 4月17日 |
| ▶ 米・イラン戦闘停止を踏まえ、今後の原油価格をどうみるか — 当面100ドル前後で推移、戦闘再開なら150ドルも — | 梶野裕貴 | 4月10日 |
| ▶ ドイツの公共投資、防衛とインフラで大きな差 — 債務ブレーキ緩和から1年、輸入依存を強める防衛品目、供給制約に苦慮するインフラ — | 中井勇良 | 4月3日 |
| ▶ 高まる米国企業の収益力 — 労働から資本へのシフトと交易条件の改善が主因 — | 森田一至 | 4月2日 |
| ▶ 米国で進むA I 代替、雇用370万人減も — トランプ政策も助長、求められる補完的な活用への誘導 — | 森田一至
立石宗一郎
西岡慎一 | 3月30日 |
| ▶ 原油高定着ならF R Bは大幅利上げも視野 — 原油120ドル定着で政策金利1%押し上げ — | 森田一至 | 3月24日 |
| ▶ 中東危機の長期化が欧州に落とす影 — 原油・ガス価格の高止まりでインフレ率2%押し上げ、消費▲1%押し下げ — | 中井勇良 | 3月23日 |
| ▶ ホルムズ海峡が封鎖されても、すぐには「掘りまくれ」ない米国 — 中東産原油の代替調達先として過度な期待は禁物 — | 梶野裕貴 | 3月18日 |